

## 学位論文の要旨

(和文) 室町期における茶の湯と「たて花」の創成

—地方・民衆・実践の視点からの文献史学的研究—

論文題目 (英文) The Creation of "Chanoyu" and "Tatehana" in the Muromachi Period : A Bibliographic-Historical Study from the Perspective of Localities, Peoples, and Practices

広島大学大学院総合科学研究科  
総合科学専攻

学生番号 D172443

氏名 石橋 健太郎

### 論文の要旨

本研究は、室町期から江戸初期に至る茶の湯と「たて花」（現在、花を活けた作品の総称を「いけばな」というが、室町期には「たて花」と呼ばれた。）の実態を分析検証するとともに、その創造過程の一端を明らかにしようとするものである。

室町文化は、現代において日本伝統文化の起源と認識され、なかでも茶の湯と「いけばな」は代表的なもののひとつに数えられる。しかし、これらの創造過程については、比較的明らかな近世以降に比して、中世以前については不明なことが多い。史料が僅少であることに加え、従来の茶道史や華道史の研究のあり方が少なからず影響していると思われる。そのあり方は、家元制度に由来する。身分制の確立や家元制度が創設された江戸初期に、茶道では千利休を「わび茶」を大成した「茶聖」として、華道では池坊二代専好を「立花」（りっか）を大成した中興の祖として位置づけ特別視、あるいは神格化し、これが家譜や伝書によって広く喧伝された。従来の茶道史や華道史の研究ではその家譜や由緒書、伝書が史料とされ、研究対象が利休の道統による「わび茶」や、専好の道統である「池坊」を中心としたものとなった。これにより、利休や専好の前史である古代・中世については軽視される傾向がみられ、質的な展開を欠いてきたといえる。

そこで本論では、このような研究の不足を補う一助となることを期待し、関係事象を記録する限られた史料を再検証するのに加え、絵画資料や全国各地から出土した考古資料の検証も行い、より多角的な視点からの分析を試みる。考察には、文献史学の諸分野（政治史・思想史・海外交易史・宗教史）の視点に加え、考古学や美術史、美学からの視点、茶道と華道、香道の実践による経験知からの視点も加え論じる。また、従来の茶道史や華道史において不十分であった地方や民衆という視角を重視し、地方文化の動向や無名の民衆たちの寄与にも注目して実態を分析・検証し、茶の湯と「たて花」の創造過程を考察する。

次に本研究の構成を概観した上で、各章の概要をまとめる。本研究は2部構成をとり、第1部は茶の湯をテーマとし4章で構成し、第2部は「たて花」をテーマとし3章で構成して、序章と終章を加えた。序章では、現在の課題認識をまとめたうえで、旧来の先行研究を挙げるとともに、新たな概念と、それに基づいた研究を紹介する。

第1部は、第1章で室町期特有の闘茶を、第2章で雲脚茶を、第4章では淋汗を検証し、室町期の茶の湯の具体像を探るとともに、その背景を考察する。第3章では、闘茶が茶道の濃茶に、雲脚茶が茶道の薄茶になったという仮説の実証を試みる。第2

部では、第1章で七夕花会を、第2章で宮中の「たて花」受容を、第3章で江戸寛永期の立花サロンを分析し、室町期の「たて花」から江戸初期の立花に至るまでの花作品の具体像を探るとともに、その背景を考察する。終章は、第一部と第二部の成果を踏まえた総論とし、当初の課題に対する回答を示すとともに、室町期の茶の湯と「たて花」に共通する特徴を考察する。また、本研究の展望として、中世の茶の湯から近世の茶道（わび茶）への連関について見解を述べる。

最後に本研究を構成する各章について、個別に要約する。

#### ◎第一部「中世飲茶の諸様相」

○第一章「闘茶について一闘茶札と文献資料から探るその具体像」では、闘茶の具体像を探った。闘茶札には、現行の香札と同形式と独自の形式のものがあることを確認した。草戸千軒町遺跡出土の独自の形式のものには、2種の茶を飲み分ける種目である「本非」や「都鄙」、「新古」の墨書が見られた。闘茶の盛行の背景には、飲茶習慣の広まりや、京都を中心とした茶産地の成立の影響がうかがわれた。茶の産地は、本茶（京都梅尾産）を筆頭として序列化されていた。考古資料や文献史料から実在が推定できる本非茶勝負以下の種目を確認した。文献資料では、『喫茶往来』や『異制庭訓往来』、『遊学往来』から、闘茶会の装飾、室礼、接待の内容、会の次第、茶道具、点心（料理）、闘茶の種目がうかがえた。闘茶流行の始期と終期については、通説通り、始期を鎌倉末期あるいは室町初期とすることに矛盾はなかったが、終期については通説とは異なり、室町後期に廃絶せず織豊期にまで継続し、近世初頭に廃絶したことを提示した。また、日本の闘茶の由来とされる中国の闘茶と日本の闘茶の関係性を考察した。中国の闘茶の具体的様相を分析すると、宋代の闘茶は、水色（茶湯の色）や茶湯に浮かぶ泡、或いは味や香りなどによって、茶そのものの良し悪しを勝負するものであった。一方、日本の闘茶は、闘茶の参加者が二種以上の茶を味や様子で飲み分け見分ける勝負で、区別する能力を競うものであった。結果、茶そのものを競う宋代の闘茶と、参加者の飲み分ける能力を競う日本の闘茶とのあいだには、構造的な違いがあることを確認した。

○第二章「『看聞日記』にみる雲脚茶」では、『看聞日記』にみえる伏見宮家の闘茶と雲脚茶を分析した。宮家の闘茶は、正月や二月に恒例の催しとして持ち回りの「順事」で催されるものであった。闘茶は、会所などの公的な接客空間を会場とし、参加者を比較的上位の男性に限るものであったが、雲脚茶は、主人の居間や女性の空間である局、台所、「殿上」（下位者の控室）などの私的空間を会場とし、女性や地下の家臣、宮家の関係者が参加することができるものであった。闘茶では本茶を中心に飲茶され、雲脚茶会では非茶（本茶以外の茶）が飲まれた。雲脚茶会は、おおよそ五月から八月の間に順次で行われ、頭役（主催者あるいは世話役）の順番が鬮で決められた。祇園祭の内祭の一環であったことから、性別や身分の制限が緩和される無礼講的な性格を備えていたことが想像された。男女が左右二組に分かれ、何らかの勝負して、濃度の薄い茶を大量に飲みあって競い合うものであったことがうかがわれた。

○第三章「闘茶と濃茶、雲脚茶と薄茶の関係性」では、「闘茶」と「雲脚茶」それぞれの特徴と両者の関係性が、茶道の濃茶と薄茶の特徴とその関係性に相似していたため、

比較分析を行った。茶の濃度、泡、品質、碗、飲み方、席中の会話、菓子、袱紗使い、格式を指標として検証した。その結果、それぞれの特徴及び関係性の相似が認められた。例えば、濃度については、勝負事である闘茶では、茶の高濃度が追求されたことが想像され、とろみが強く飲み下しにくい濃茶の濃度のようなものであったことが想像された。一方、競って大量に飲む雲脚茶は、薄茶のような飲み易い濃度であったと推測された。「雲脚」の語については、泡がすぐに消える悪茶という従来の語意は誤りで、単に泡を示すものであった可能性も提示した。この比較分析から、室町期の闘茶が近世茶道の濃茶に、雲脚茶が薄茶に変換されたことを提示した。この仮説によると、先学が説明してこなかった、濃茶と薄茶が存在する理由や、濃茶において、極度に高濃度の茶を二口だけ飲む理由なども説明が可能である。

○第四章『経覚私要鈔』にみる文明元年の淋汗」では、『経覚私要鈔』にみえる、文明元年ひと夏に、奈良の有力国人である古市氏が奈良興福寺大乘院門跡も務めた経覚のために催した特異な淋汗を分析した。淋汗は、主に禅寺で施される夏の風呂のことである。古市氏による淋汗では、浴室の各壁面に棚を置くなどして食物や装飾用の器物が並べ飾られた。そこに用いられた器物や配置状況から、室町期に成立する座敷飾りが想起された。そこで、室町期の座敷飾り式法書である『君台観左右帳記』が記述する装飾の様相との比較分析を行った。結果、淋汗の浴室装飾が足利将軍家の座敷飾りの規式に基づいて行われたことが推察された。「茶湯」は余興の一つの茶礼として、また、役枝の構成をもつ「たて花」が室礼として採用されていたこともうかがわれた。浴室や庭の装飾は、将軍家由来の座敷飾りを範としたものであり、深い教養を基に故事を表現したものであった。この淋汗は、武家有職による会所のもてなしに準じた由緒正しいものであった。

#### ◎第二部「中世から近世初頭の花作品の諸様相」

○第一章『看聞日記』にみる「たて花」様式の成立への道程」では、伏見宮家の「七夕草花法楽」の実態を分析した。この「法楽」は、形式的な本尊として「達磨」軸を飾っており、二星への法楽とはいえないものであった。また、花と唐物の花瓶や盆、香台を一組として出品するもので、花だけ出品した者が出品者に数えられない「七夕唐物陳列会」というべきものであった。花が軽視される状況下では、花の活け方が工夫されたとは考え難く、当時は様式などが未成立の段階であったと推察された。伏見宮家の「七夕花会」のルーツを探ると、室町初期に宮廷社会でみられた、勝負事を伴う「花合」が、室町中期において宮廷社会を中心に行われた「七夕花会」と足利将軍家の年中行事としての「七夕の花献上」へと派生したことが推察された。幕府と宮家の儀礼にふさわしい格式を備えるために賭博性が排され、単なる花献上という贈答儀礼へと洗練されたものと考えられる。

○第二章では、『言国卿記』にみる、宮中の「たて花」受容とその背景」では、後土御門期における宮中の「たて花」受容の過程を読み取り、背景を考察した。室町幕府三代将軍義満の在任期間に、武家主導で始められたと考えられる七夕の「花合」が宮中に及んだが、その花は、七夕の特別な祭礼用具で日常的なものではなかった。応仁の乱中の10年間、後土御門天皇は八代将軍義政邸である室町殿に避難するなか、仮御

所に飾られる「たて花」に慣れ親しんだことが推測された。その後天皇は自ら命じて「たて花」を活けさせるに至った。内裏への還御後も、それ以前には習慣の無かった「たて花」を飾らせた。宮中への「たて花」導入の契機として、応仁の乱中の仮寓における天皇の「たて花」体験と、内裏への書院造設備の導入を提示した。この宮中「たて花」の具体像を文献資料や絵画資料に探り、多種の「花材」を用いて複数の「役枝」で構成したものであったと類推した。天皇家の「たて花」導入は、政治的にも経済的にも優位にあった武家によって庇護されていた宮廷が、武家文化の習俗である、日常的な室礼としての「たて花」を受け入れたと結論付けた。

○第三章では、「近世初期の立花の一様相—『隔莫記』にみる立花—」では、『隔莫記』の記事から、洛北地域において、鹿苑寺を中心として立花を愛好し稽古する集団が存在していたことを示し、その実態を明らかにした。立花会を「立花興行」などと称し、所属する人々を「立花衆」などと呼び、少なくとも寛永14年(1637)から寛文元年(1661)の間、会は存続した。会は事前に期日を決めて催され、稽古場所は構成員が持ち回りで担当したものと思われる。筆者・鳳林承章は、池坊二代専好や門弟の作品を見物したり、その立花図絵を見たり写本を作成させたりもし、専好と面識も持ったが、記録からは親密な関係性はうかがえなかった。身分差の影響も考えられるが、両者の関係はライバル的なものであったとも想像された。一方、同時期に後水尾天皇も立花に執心したのであるが、天皇が専好を招き専好立花を鑑賞していたことなどから、専好を天皇の実質的な指導者とするのが妥当であることを確認した。一方、承章の立花衆にとって、寺院で「三具足の立花」を活けて奉仕することが名誉であったことがうかがわれた。もともと供花であった「三具足の花」は、室町期以降宗教性が薄れ、座敷飾りの装飾具に用いられるようになったものであった。立花衆が活けるそれは、その具体的様相が専好立花とは異なり、真と下草で構成されていた可能性がうかがえ、「たて花」を髣髴とする古式のものであったとも想像された。なお、承章の立花衆の活動の文化的位置づけについて、寛永文化の特徴とされるサロンの一つに位置付けられることを提示し、既に指摘されている宮廷のサロンと上層町衆のサロン以外に、寺院・僧侶を中心としたサロンが存在したことを示す一例となるものであることを指摘した。

本研究において室町期の茶の湯と「たて花」の実態を検証する中で、これらに共通する特徴について考察した。その特徴として、宗教性の喪失、唐物あるいは唐物との関連性、日本化、生活文化の構成要素、集団性、遊戯性や勝負性、大衆性がみられた。

また、室町期から江戸初期に至る茶の湯と「たて花」の創造過程については、当時の社会的文化的状況を勘案し、次のようなことを想定した。唐物を珍重し崇拝する気風が顕著であった室町期に、中国の習俗や文物が生活のなかへ取り入れられるなか、飲茶や供花も受容された。文化的に定着・浸透していくなかで、茶の湯と「たて花」が創成された。中国から伝来した文物だけでなく広く習俗をも含めて唐物と定義するならば、茶の湯と「たて花」の起源である寺院茶礼と供花も、広義の唐物の範疇に含みうるものである。室町期には、当時の社会状況を反映して階層内や階層間の交流が活発化し、日常的に寄合がもたれ、社交が繰り広げられた。そこで社交を媒介する余興や装飾にも、唐物流行を反映して、唐物由来のものが多く選ばれた。そのなかに、

寺院茶礼や供花から宗教性を除き、集団で享受する形式への変換がなされた、いわば日本化された飲茶や花作品も採用された。集団で楽しめるよう勝負性や遊戯性が付加されて、勝負性のある闘茶や唐物花瓶比べや、遊戯性の顕著な雲脚茶会や唐物花瓶鑑賞会などのように日本独自の形式に変換された。その交流の場として設けられた会所には、装飾として唐物が並べ飾られたのだが、そこに含まれた唐物花瓶には、のちに「たて花」の名で呼ばれることとなる花作品が添えられた。また、唐物を用いる寺院茶礼に基づいた茶会も催された。これら唐物は、参加者の高揚感を高め、一体感を醸成する装置としての役割を担った。

室町期は、いわば唐物の時代であり、寄合の時代であったといえる。この時期の茶の湯や「たて花」の実態を検証すると、これらが、唐物や寄合抜きには成立しえなかったことが理解された。